BRAND STORY POSITIVE & NEGATIVE WORLD & KYOTO

トラサルディ（イタリア）

TRUSSARDI

トラサルディの創業は今世紀初頭である。だがバッグ製作の歴史は1971年からと比較的新しい、ニコラ・トラサルディが３代目社長に就任して以来「ベルガモの錬金術師」といわれるデザイン感覚が評判になり、現在イタリアのファッション界でも特に注目を集めるメーカーに成長したのである。

伝統美に現代的な機能性をプラスした商品は世界中の女性に愛されている。現代にマッチしたカジュアルバックは特に定評がある。

軽量で機能性が重視されているバックは素材がコーティングされ、その新しさとファッション性は続々とイミテーションが現れるほど爆発的な需要を生んだ一時代を先取りした製品である。特徴は一頭の仔羊から、わずかしか得られないナッパシルクをふんだんに使ったオリジナルプリントのものと、クレスポを素材にしたスポーツ感覚のものがあげられる。しなやかで、軽快さに富んだ製品には、すべてのファッションへの追求を怠らないという精神で、独自のカラーとデザインを形づくっている。クレスポという全天候型の素材感、カジュアルなスタイリング縫製のよさ、手頃な価格、トラサルディーの大躍進はこんなところが理由でしょう。

粋なイモ屋は京都にごじゃる　丸寿商店（京都）

「えーっと、こないだはねえ、ＮＨＫが昼のプレゼントとかいうので、それから去年は“女ひとり旅”で若尾あや子さんが来てくれはってね、あぁ、２、３日前にも女性自身が取材していきましたんえ。」大メジャー大会である。何時、通っても行列ができている。それもアメスクリーム屋のものとは、趣きも歴史も異にする行列が。丸寿商店、屋号いも安。創業以来、百数十年“いも”一筋で、あのおじいさんが三代目、お話をうかがった息子さんも店を手伝っておられる。最近はマスコミの影響で、観光旅行客が雑誌片手に、という客が多くなったようだが、主流は若い女性である。修学旅行の時に買っていった女の子が新婚旅行の時にまた買いに、というようなこともあるそうだ。しかし、店を育てたのは、“旦那衆”であるという。現在の場所に移ったのは戦後のことで、それまでは南座の前にあった。場所柄、よい旦那衆がつき、その子から孫、そして知り合いへ……一見さんお断りに近い世界があったようだ。京都の粋な旦那衆が育てたいも屋は、今も気負わず、細々とつづいている。ビブレ帰りのおしゃれなあなた、こんな“おしゃれ”を見逃す手はない。彼、彼女で肩を並べて、また家族へのおみやげに、マックフライポテトよりいもをどうぞ。ただ、焼いものまん中ばっかりほしがるような不粋なまねはくれぐれもしないように。丁重に断わられますから。

飛入り編集者コーナーその１．

このページは読者の方が飛び入りで取材、編集をしていただくコーナーです。掲載されますと１ページあたり一万円の図書券をプレゼントいたします。どしどし、ご応募下さい。ご応募は編集室まで。

こんな自分が恥ずかしい。

トイドールズライブに思う

汗、汗、汗、会場内はつめかけた若者たちの熱気であふれかえっている。暦の上ではもう師走に入り冬本場を迎えようとしているこの時期に厚手のコートを脱ぎ捨て上半身裸で踊り狂っている者まで見受けられる。傍目からは何の乱痴気騒ぎが起こったのかと飽きれかえってしまう光景ではあるが本人達は全然おかまいなしのようである。

この会場はと言えばビックバンと呼ばれるライブハウスのパンクロックのコンサートなのである。イギリスから来日したトイドールズというバンドに約三百名もの若者が詰め掛けたらしい。

「熱狂」という言葉がある。まちがいのように熱心なこと、ひどく興奮し夢中になること、と辞書には記されているがまさにその言葉が示す通り気のふれたように熱心に踊っている。皆が自分の思い思いの身振り手振りで自己表現しているようにも見える。そのすさまじいパワーに圧到されながらたいして年齢も変わらないのに妙に冷めきっている自分がどうもおじん臭く思えてくる。自分の音楽の最上の楽しみ方と言えば、部屋のライトを暗めにして、グラスに注いだバーボンを少し口に含みながら一日を振り返える。煙草に火をつけ煙を眺めながら世の中の虚無を思う。そこで流れてくるオーティスの切ない歌声に感動し、フランス映画のワンシーンでも浮かんでくるようなナルシスチックな妄想にふける自分に酔いしれるわけである。こんな固定観念にとらわれて音楽を嗜む自分にとっては到底理解できない事のように思える。

音楽にはパワーがある。世の中に多くの音が散乱し、街を歩いていれば必ず何処からか流れてくる音を耳にし、それが人間の感性を揺すぶり心地良くしたり不快に感じさせたりする。本屋の店頭には幾種類もの音楽雑誌が立ち並び、テレビのチャンネルを回せば音楽番組が流れている。若者はこの情報網の中から自分の気に入った音を拾い上げ、好んで聞こうとする。この選択の好みは個人差により多種の音楽ジャンルに広がってくる。好きになった音楽に対して個人個人ある種のプライドを抱き音楽家から得る影響は多大なものとなる。これはファッションであり、行動であり、考え方であり、嵩拝精神はますます高まる。老若男女、誰でも自分の好きな音楽というものを多少なりとも持っているはずだ。それだけ現代社会の中に音が侵入し人間の感性を鋭く揺す振っているのだろう。そこから生まれてくるパワーは底知れず大きなものがあり、若者であればある程その表現力は大きく広がってくる。この会場に集まった若者たちも音楽が生み出したある光景なのだろう。